考え方が生成される過程や，「アフリカの潜在力」という言葉をめぐって，日本人研究者とアフリカ出身の研究者との間で現在繰り広げられている議論について，少しでも触れられていれば，「アフリカの潜在力」という考え方が日本人研究者による独り善がりな考え方ではないということは明示されただろう．そうすることによって，「アフリカの潜在力」という言葉を使う意義がより明確になり，各章の説得力が増したかもしれない．

いずれにせよ本書が日本人のアフリカ観を大きく変える一冊であることには変わりはない．アフリカ経済の急成長に伴って日本・アフリカ関係が変化しつつある今，まったくアフリカに興味関心を抱いていなかった人々の前に突如アフリカの姿が立ち現れることも珍しくないだろう．少しでもアフリカに興味をもち始めた方々が，最初に手に取るべき一冊としておすすめしたい．

Muhammad Hakimi Bin Mohd Shafiai. *Islamic Finance for Agricultural Development in Malaysia*. Kyoto: Center for Islamic Area Studies at Kyoto University, 2013, xi+283 p.

上原健太郎 *

商業銀行としては1975年に登場し，現在に至るまで拡大・変容を続けるイスラーム金融は，その発祥地である中東諸国のみならず，東南アジアにおいても，その発展を顕著に示してきた．その立役者といえる存在が，イスラーム金融システムの育成・拡充に努めてきたマレーシアである．特に，同国は農業をはじめとするさまざまな産業分野に対してシャリーア適合性（イスラーム法への適合性）を担保するイスラーム金融の商品開発を行なってきた．京都大学イスラーム地域研究センターのブックレット・シリーズ“Kyoto Series of Islamic Area Studies”の第9巻目として刊行された本書は，ムザーラア（*muzāra'a*）とムサーカート（*musāqāt*）というイスラーム金融商品を基にした「農業における生産物・損失分配」（Agricultural Product and Loss Sharing，以下aPLS）モデルがマレーシアの農業，特に休閑地の活用において有効であることを示し，またその導入を提案している．

本書の著者であるムハンマド・ハーキミー・ビン・ムハンマド・シャーフィイー氏は，マレーシアのマラヤ大学にて学士号と修士号を，京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科において博士号を取得した後，現在マレーシア国民大学経済・経営学部に在籍している．本書は，2012年3月に京都大学へ提出された博士論文を基に加筆・修正したものであり，イスラーム法学の原典研究，近代イスラーム経済学の理論研究，また臨地調査という3つのアプローチにより構成されている．

本書は，以下の序論，および6つの章で構成されている．

序論　歴史的背景

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

第 1 章　イスラーム経済学における農業
第 2 章　現代マレーシアのイスラーム化とイスラーム金融
第 3 章　イスラーム法における農業契約—ムザーラアとムサーカートを事例として
第 4 章　マレーシアにおける農業経済と土地使用上の問題
第 5 章　マレーシアにおけるイスラーム型農業金融と休閑地の活用
第 6 章　結論と政策提言

第 1 章は，近代イスラーム経済学における農業金融の位置づけとその意義について，分析がなされている．著者は，近代イスラーム経済学が既存の経済学のオルタナティブであるべきとの見解から，あらゆるセクターに対してイスラーム性が担保されるような実践が必要であると主張する．金融システムについていえば，近代イスラーム経済学は，商業セクターを想定した理念的な金融商品のモデル（損益分配契約，Profit and Loss Sharing，以下 PLS）を提唱しているが，その他のセクターについては，そのような理念モデルの提唱はなされていない．そこで著者は，商業セクターと同様に重視されるべき農業セクターにおけるイスラーム性を担保した実践を可能にするためには，農業を想定した新たな金融商品の理念モデルを創出すべきだと述べている．

第 2 章では，マレーシアにおけるイスラーム金融の育成・発展について考察が行なわれている．ここでは，マハティール元首相による新経済政策（New Economic Policy），アブドゥッラー・バダウィ前首相の政治指針である「文明的イスラーム」（Islam Hadhari）が挙げられている．これらの政策に共通する特徴は，物質的発展と精神的発展との両立を可能とするイスラーム観である．そして，その具体的な実践としてイスラーム金融産業の育成・発展が位置づけられている．

第 3 章から第 5 章は，マレーシアの休閑地を活用する上で，ムザーラアとムサーカートというイスラーム型農業契約の有効性に着目し，さらに具体的な導入を提案している．

第 3 章では，まずイスラーム法学におけるムザーラア，ムサーカートの説明を行なっている．これらは，ともに農業における合弁事業を地主・小作間で行なうためのパートナーシップ契約である．ムザーラアが，田畑を耕作する場合に用いられるのに対して，ムサーカートは果樹栽培を行なう際に用いられる．次に著者は，両契約のシャリーア適合性に関する議論を踏まえた後，それらを aPLS モデルというイスラーム金融の新たな理念モデルとして位置づけを行なう．

イスラーム金融の理念モデルである損益分配契約（PLS）は，商業を想定としており，資金提供者が事業者に資本を提供し，両者が事業後の利潤を貨幣ベースで分け合う．しかし，農村部では，地主が小作へ土地を提供する．また農家が生産された農作物を自家消費するなど，貨幣ではなく，実物を通じた取引が大きな割合を占める．従って著者は，PLS モデルをイスラーム型農業金融のモデルとして適用することは妥当とはいえないという．

そこで，事業の成果として農産物を分配するムザーラアとムサーカートに基づいたaPLSモデルが，農業を想定としたイスラーム金融の理念モデルとして適当であるとされている．

続く第4章では，著者がマレーシアの各州で実施した農業休閑地と，その所有者の家計や資金調達，経済的課題に関する聞き取り調査の結果およびその分析が取り上げられている．臨地調査の結果からは以下の2点が判明している．第一に，イスラーム金融の実践的認知度は低いが，期待度は高いという点である．調査対象者の約7割は，イスラーム金融の存在を認知していなかったが，著者がaPLSモデルを紹介した際には，それに関心をもつものが非常に多かったという．第二に，個々の農家への資金融資の適切性の問題である．マレーシアの農村では，金融機関が農家に融資を行なう際，農家の自己消費分を除いた農作物の販売益のみを基に貸出額を査定している．著者は，この点について，農家の自家消費を含めた耕作規模に配慮した適切な資金調達が行なわれるべきだと主張している．

結論に相当する第5章と第6章では，前章の臨地調査で明らかとなった①農家の抱える経済問題や，②マレーシアの経済発展の観点から，aPLSモデルの導入を提案している．①については，特に休閑地を耕作する上でのaPLSの有効性を主張している．つまり，aPLSにおける利潤の分配は，金額ベースでなく農作物を通じて行なわれるため，このモデルは農家の実物をベースにした生産・販売・消費活動を反映することが可能であり，休閑地を耕作する上でも従来型の農業金融より優れて機能し得るという．②については，そのようなaPLSによる休閑地の開発が，それに伴う雇用創出による貧困の削減や所得の向上を可能にし，農村部の発展，ひいてはマレーシア全体の経済発展に貢献すると評されている．

以上，本書の内容について各章ごとに要点を説明してきた．次に，近代イスラーム経済学の潮流，またイスラーム金融の実践における本書の意義を挙げる．

第一に，現代イスラーム金融のPLSに代わる新たな金融商品の理念モデルを提起した点である．近代イスラーム経済学では，イスラームの理念に沿った金融商品がPLSであるとする「ムダーラバ・コンセンサス」を重視する立場が大きな影響力をもっている［長岡 2011: 98-99］．しかし，前述のように，PLSは商業を想定とした金融商品であり，本書で取り上げた農業など，その他の産業を想定とした金融商品の理念モデルは存在していない．本書は，農業を想定としたaPLSモデルを提起することによって，近代イスラーム経済学における理念モデルの多様化に貢献しているといえる．

第二に，そのような金融商品のモデルが，休閑地の活用という農業分野の課題に対する解決策として提起されているという点である．近年，近代イスラーム経済学には，従来型金融商品が行き届かない領域や，それらが機能していない分野にこそ，イスラーム金融が積極的に展開していくべきであるとの主張

が見受けられる［Asutay 2007: 16; Nagaoka 2014: 16-17］．休閑地の活用という，従来型金融が対処しかねている問題の解決策として，aPLS モデルが提示されていることから，本書の問題関心もかかる研究潮流の文脈において位置づけられよう．つまり本書は，このような主張に対して，農業分野における経済問題への解決策を提起しているのである．

第三に，東南アジアの経済発展との関係について aPLS の意義を考える．東南アジアの農業分野は，農村開発を通じて雇用を創出するなど，地域の経済発展にとって重要な役割を担っている．よって，このような産業の振興を，資金調達の面で支える金融商品の充実が必要となる．その中で，農村部のムスリムに向けたイスラーム金融商品の開発は重要な課題のひとつといえる．その点で，本書の aPLS モデルは，マレーシアのみでなく，マレー・イスラーム世界の農村部の発展に広く寄与しうる潜在性を秘めた金融商品のモデルであるといえよう．

以上の意義から本書の試みは高く評価されるが，今後，aPLS モデルを農業の現場に適用する上では，検討すべき点が見受けられる．たとえば，aPLS の経済合理性における分析である．本書では，シャリーア適格，および分益小作の効率性という観点から，aPLS が休閑地の耕作に適していると主張された．しかし，分益小作制に類する aPLS 自体の経済合理性については分析が十分になされていないため，従来型の分益小作に関する先行研究との比較を行ないながら，今後の更なる検討が求められよう．

しかしながら，本書における分析方法や問題関心は，今後のイスラーム金融研究において，有益な点を含んでいることに変わりはない．本書で展開された aPLS モデルは，近代イスラーム経済学においてイスラーム型農業金融という新領域を開拓するとともに，マレー・イスラーム世界における農村部の発展に対する実効性をもつ政策的理論を提示している．

引　用　文　献

長岡慎介．2011.『現代イスラーム金融論』名古屋大学出版会.

Asutay, M. 2007. A Political Economy Approach to Islamic Economics, *Kyoto Bulletin of Islamic Area Studies* 1(2): 3-18.

Nagaoka, S. 2014. Resuscitation of the Antique Economic System or Novel Sustainable System? Revitalization of the Traditional Islamic Economic Institutions (Waqf and Zakat) in the Postmodern Era, *Kyoto Bulletin of Islamic Area Studies* 7: 3-19.

大林　稔・西川　潤・阪本公美子編.『新生アフリカの内発的発展―住民自立と支援』昭和堂，2014 年，349 p.

黒崎龍悟 *

本書は龍谷大学国際社会文化研究所の研究プロジェクトの成果として出版された論文集である．序説にあるように，現代のアフリカでは市場経済化の進展と資源ブームがあいまって高い成長率をみせる国々もあるが，他方で経済格差，食料問題，環境問題，紛争等

* 福岡教育大学